

V 研究活動—資料報告・研究ノート—

1 うぶすめ遺跡採集土器

相田 泰臣

(1) 遺跡の概要

うぶすめ遺跡は、新潟市西蒲区五ヶ浜の通称うぶすめ沢の北側に位置し、現海岸線から約50m内陸側の砂丘に立地する（第1・2図）。

うぶすめ遺跡で遺物が採集できる層は、現在の海浜面から2m前後の高さにある暗灰褐色シルト～砂層で、さらにその上には厚さ10mを超える砂丘砂層が堆積している（写真）。そのため、遺物を採集できるのは強風・高波による浸食作用によって、砂丘が崩落し、砂丘斜面に遺物包含層が露出する、あるいは遺物包含層が崩落して海浜で確認される場合に限られる。このように遺物を採集できる条件は厳しいが、これまでに少ないながらも弥生時代終末期（古墳時代早期）・古墳時代前期・後期、平安時代の遺物が採集されてきている（第4・6図、相田2010・岡本2016）。

また、うぶすめ遺跡から海岸線を約200m北上した通称穴口沢に位置する穴口遺跡では、古墳時代前期の土器が採集されている（第5図、山口1994）。

(2) うぶすめ遺跡採集土器について

本稿で新たに報告するうぶすめ遺跡採集土器は、2015年1月2日に前山精明氏が採集した土器1点である（第3図）。なお、本資料は2021年4月20日（火）～9月5日（日）に新潟市文化財センターで開催した令和3年度企画展1「地下2メートルの考古学」において展示された。

土器は底部を欠損するものの、丸底の小型壺と考えられる。体部は全体の3割程度、口縁部は全体の1割程度が残存する。底部付近から肩部にかけてやや扁平気味に湾曲する体部に、比較的短い口縁部が外方へ直線的にのびる形態をなす（第3図）。口縁部径は10.8cm、底部を含んだ推定器高は14.0cmで、最大径を体部中位にもつ。

体部外面および口縁部内面では一部ヘラミガキ調整を確認できるが、全体的に調整は粗く、口縁部や体部外面においてはハケメ調整痕も認められる。また、体部内面には粘土紐の接合痕も観察される。

(3) 土器の位置づけとまとめ

器形や調整の特徴などから、報告土器は滝沢規朗氏の編年の様相9〔滝沢2014・2017〕、小野本敦氏の編年の3段階〔小野本2019〕と推測する。上記の位置づけが正し

ければ、当該土器は古墳時代中期に位置づけられる。うぶすめ遺跡が継続して利用された遺跡なのか、あるいは断続的に利用された遺跡なのかは現状で不明であるが、当該資料によって、弥生時代終末期から古墳時代後期までの資料がこれまでに採集されたことになる。

うぶすめ遺跡から北東へ約4km、標高112mほどの丘陵上には、全長約49mの日本海側最北の前方後円墳である角田浜妙光寺山古墳が2019年に再発見された。古墳はその立地や形態などから、海上交通を掌握した被葬者像が推定されている〔橋本2021など〕。これまでのところ、古墳周辺には古墳時代の遺跡は確認されていないが、うぶすめ遺跡のように海岸部の砂丘下に遺跡が埋没して存在する可能性もあり留意される。

引用・参考文献

- 相田泰臣2010「うぶすめ遺跡・穴口遺跡採集土器」
『三条考古学研究会機関誌』第4号 三条考古学研究会
岡本郁栄2016「新潟市角海浜から出土した遺物と堆積環境」
『新潟考古』第27号 新潟県考古学会
小野本敦2019「第4章 古墳時代 第2節 土器 第2項中期」
『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
滝沢規朗2014「新潟県における古墳時代中期の土器について
(上) —器種分類と基準資料の提示—」
『三面川流域の考古学』第12号 奥三面を考える会
滝沢規朗2017「新潟県における古墳時代中期の土器について
(下) —細別器種の変遷と隣県との関係—」
『東生』第6号 東日本古墳確立期土器検討会
橋本博文2021「新潟市西蒲区角田浜で新発見の前方後円墳について」『令和2年度新潟市文化財調査概要』新潟市教育委員会
山口栄一1994「穴口遺跡」『巻町史』資料編1考古 卷町



うぶすめ遺跡のある砂丘斜面

V

研究
活動
資料
報告
・研

